

# 楠川城

やまもとひでお  
山本秀雄

楠川区主催「城祭り」



資料紹介の前に、城祭りについて簡単にふれさせて頂きます。楠川城が先に上屋久町の文化財に指定されたのを機に、村の歴史と文化を見直す動きが高まり、今年端午の節句の日、楠川区主催、上屋久町後援の「城祭り」が行われた。ねらいは二十一世紀にむけた町興し？ 楠川城趾は現代に再び登場して、多くの人達に大きな夢を与えたのである。

清掃なった城趾に立つた。城跡は三つの曲輪も空堀りも昔の姿をそのままに保存されて景勝地にある。晴れて遠く種子島を望み、また眼下に静かな城之川が流れる。河口は松崎の浦と結び海に入る。当日は雨で細見を妨げられたが、集落の薨が濡れて当時を偲べせた。蛇足ながら、後日のため城祭りの一部を

記すことにする。

行事項目は次の通り。

- 一、記念式典は曲輪で、場所柄か厳粛に執行された。
- 二、祝賀会場は城趾の下、城之川右岸旧県道空地を利用して、特設のテントの中。催事コーナーも総てテントで、一大テント村の出現が珍らしかった。
- 三、催事コーナー（舞台を正面に、その両翼が催事コーナーとなる。）

各コーナーは趣向をこらしていた。

- (イ) 食品・食事コーナー
- (ロ) 郷土産品即売コーナー
- (ハ) 特別協賛者コーナー（島内外を問わず出品か）
- 名物の角マキ・カカラン団子・お茶など評判
- (ニ) 展示品コーナー
- 歴史資料関係（古文書等は雨のため見合わせる）
- 薬草展示（開花したガジュツの花に注目が集まる）
- 農産物関係品（各種）
- (ホ) 体験コーナー

○城之川河岸は昔のタタラ製鉄所跡、よって原料砂鉄の採集を水洗法で再現する予定が雨で惜しくも中止。

ともあれ、祭りは大変盛大で成功の声を耳にした。

※

楠川城は大永四年（一五二四）、種子島第十二代忠時が築城した城といわれる。（種子島家譜(2)忠時譜）吉田城と対になった当時の種子島家にとって、領国を経営するうえで重要な城郭であった。

築城の前年（一五二三）中国大陸の寧波で、幕府の管領細川高国と大内義興の両遣明船が争い、明軍を巻き込んだため、日



楠川盆踊り（城祭り）

## 楠川城（転載）

屋久島は、標高一九三五mの宮之浦岳を中央に、ほぼ周囲の円い島である。耕地も少なく、豪族の成長もみなかったが、南西諸島に共通する平家落人の伝承があつて、建仁四年（一一二〇四）、硫黄島からこの屋久島へも平清房らが吉田へ、盛久らが安房へ上陸し、要所に城を築いたといわれている。

これらの城址といわれるものは全島にみられるが、すべて宮

明貿易が杜絶したばかりか、東支那海は不穏な情勢となった。一五二一年から琉球貿易に雄飛していた種子島家は、領国十二島の総てが海に囲まれており、広く海上を監視する必要にせまられ、監視硝の役割をもつ西の吉田城、東の種子島の本城との中継基地に楠川城を築造したものである。今吉田城はその位置を正確に出来ないが、楠川城は規模こそ小さいが本格的な山城で、三つの曲輪は守備兵の居城を可能にした構築である。城自体海岸沿いの高地で、大手が直接海につながっており、戦略上の要地を占めている。

正しくは、本文『楠川城』（株式会社新人物往来社発行『日本城郭大系』18巻、鹿児島県関係執筆責任者・鹿児島短期大学三木靖学長）を転載させて頂いております。ご覧下さい。なお、本文掲載に当たっては五月一日に三木先生の御承諾を頂きました。

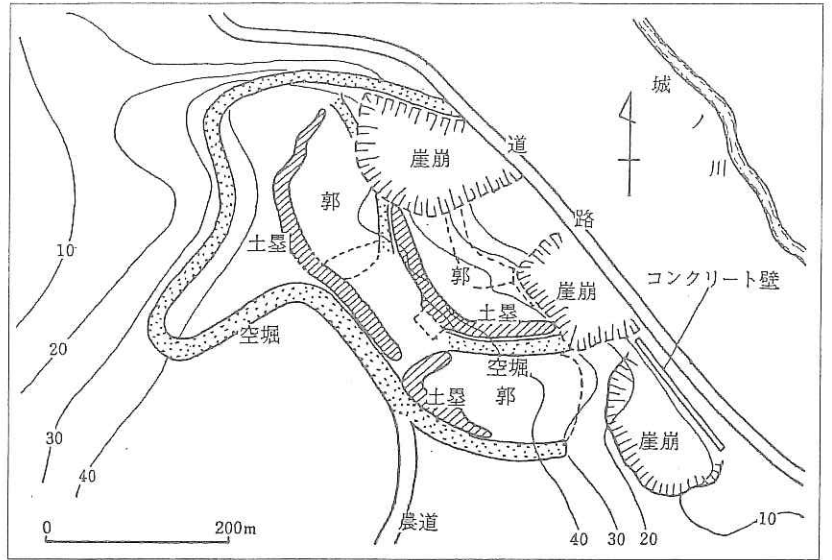
之浦の山麓に集まっている。落人たちは、その後無事に生活を続けたらしいが、史料的な裏づけはない。

史料的には、中世末、戦国期に大隅半島の禰寝氏と種子島の種子島氏との抗争がこの地に波及し、城の構築や争奪戦があつたことが記載されている。

『種子島家譜』によれば、永正十年（一五一三）三月、禰寝氏が、また天文十二年（一五四三）三月、禰寝重長が、楠川に築城したとある。

特に天文十二年には重長は手勢百五十人をもって屋久島へ渡つ

楠川城要図



て築城し、種子島を南北から攻撃しようとして楠川城を堅固にしたという。

これに対して種子島恵時しげときと時堯ときゆきとは、天文十三年一月、家臣肥後下総守時典を派遣して楠川城を攻略し、これを占領した。

楠川城は楠川の集落の東北隣、城之川の河口付近にあった。現在、島内一周道路が海岸寄りを切り取り、また、このため北側が三度にわたって大きく崩れ、全城城の三分の一近くを失ってしまった。

当城は、東・北・西の三方は断崖で、南は宮之浦岳の麓の丘陵部へ続いている。この丘陵部もかつては城内であった可能性があるが、いまのところ未調査である。丘陵部との野首は、幅六m、深さ一〇mの堀切で切断されている。

この堀切はそのまま東から北へとまわり、海岸まで空堀となっている。現在では西のほうからの登り道が林道となって通路となつては通路となつては通路であった。

城の周囲には半円状に土塁が築かれている。南側では幅一〇

m、高さ四mあるが、ともに北に向かうにつれて細く小さくなっている。

大手口は北より少し西寄りの所で、土塁が二mほど切れている。この付近の土塁と、正面には大量のサンゴの軽石やこの地層に含まれている砂岩が使われていたようである。特に大手口の突き当りには石積みいしづみの基壇があったようである。左手も一段高くなって西側の郭へ続き、正面は中央の郭の土塁が五mの高さで存在している。右は東側の小規模な郭となっている。この三郭の間を二本の空堀が通っている。

東の郭は崖の所まで続き、東端は約一〇mほど土塁があるが、あとは断崖のため土塁はない。いまは叢木が茂っているが、当時は北方の海を視野に入れることができ広く見通しがきいたものと思われる。

空堀を扶んで中央の郭は東から西へV字形に土塁がある。登り口は東側にある。この郭は中央が低くなっているが、南の一部を除いて崖崩れのため原形が損なわれている。

西の郭は一番広く、中央の郭とは二mの空堀で分けられ、外周は土塁で囲まれている。約八〇mの土塁は現在も原形をとどめており、錦竹や矢竹も生えている。しかし、崖崩れで北側は破壊されてしまった。

崖崩れの土木工事のためにこの郭へはブルドーザーが入ったため、一部がさらに壊されている。

当城は規模は普通だが、丘の先端を利用して大がかりな作事をしており、単なる砦とは思われぬ見事な山城であり、保存処置の講ぜられることを期待したい。